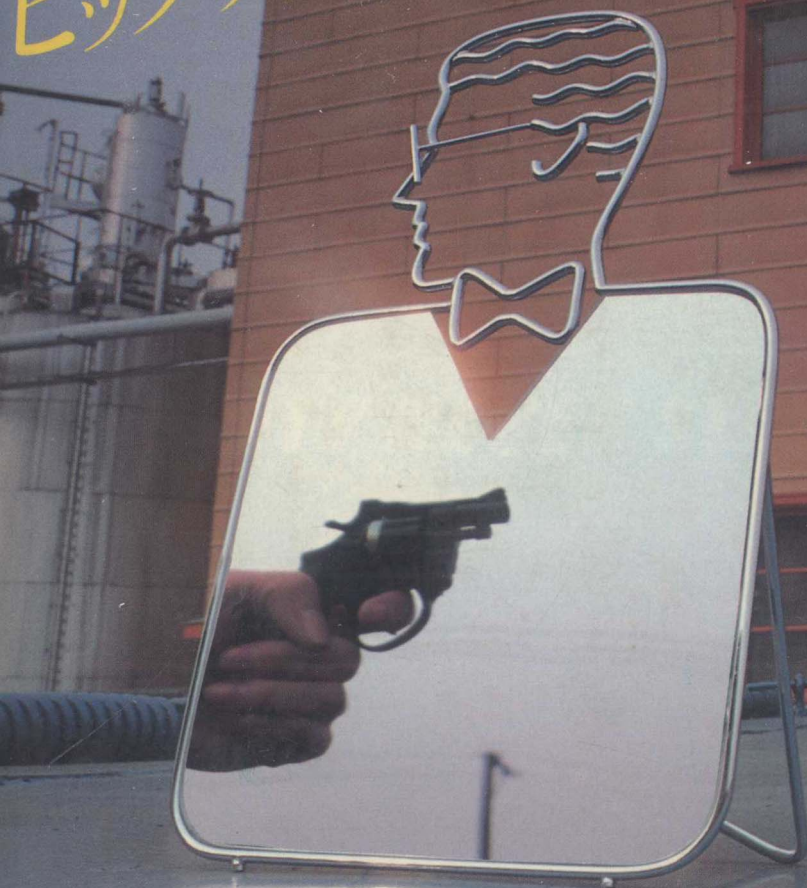


夏樹静子

ビッグアップルは眠らない



ビッグアップルは眠らない

夏樹静子

講談社

ビッグアップルは眠らない

定価 890 円



昭和57年1月20日 第一刷発行

著 者 夏 樹 静 子

発 行 者 三 木 章

発 行 所 株 式 会 社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話東京 (03) (945)1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

© Shizuko Natsuki 1982 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN 4-06-130824-6 (文2)

目次

ビッグアップルは眠らない	5
足の裏	113
漆の炎	147
誓約書開封	167
すれ違った面影	211

装帧·儘田能光
摄影·杉山 守

ビ
ッ
グ
ア
ッ
プ
ル
は
眠
ら
ない

ビ
ッ
グ
ア
ッ
プ
ル
は
眠
ら
な
い

プロローグ

一九七九年九月十一日午前六時半――。

パシフィック・エアラインズ800便東京発ニューヨーク直行のボーイング747は、アリューシャン列島の上空を飛行していた。日本時間十一日午後七時十五分に成田空港を出発してから約六時間、すでに日付変更線を通過し、間もなくアラスカの上空にさしかかろうとしている。

このあたりの九月の日の出は六時ごろなので、操縦室コックピットの窓の外には、厚い雲海の底からほのかな曙光しやうこうが漂いはじめている。

突然、コック・ピットの静寂を破って、火災警報器のベルが鳴り響いた。

アメリカ人機長が軽く後ろを顧みかえりて、

「どうだ？」と尋ねた。その声も比較的落着いていたのは、火災警報器から誤った信号が発せられるケースも少なくなかったからである。彼の問いは、本当に異常が発生しているのかどうかを確かめるものだった。

セカンド・オフィサー（航空機関士）がエンジン計器を見ると、第三エンジンにランプが点ともつている。続いてナセルテンブへ目を配る。二つの温度計の針がどちらもレッドゾーンを指してい

た。

「ナセルテンブが上っています。第三エンジンがファイアです！」

セカンド・オフィサーが叫んだ。次の瞬間、三人の乗務員の全身を電流のような緊張が走り抜けた。

「スラストレバー・クローズ！」

「スタートレバー・カットオフ！」

キャプテンが大声でいいながら、自分で第三エンジンの燃料を止める操作をした。続いて、

「ファイアスイッチ・ブル！」

セカンド・オフィサーが「ブル」と復誦して、スイッチを引いた。これで消火器を噴射する準備が整ったわけだ。

「チェック・ファイア」

ナセルテンブのゲージは依然上昇を続けている。

「ファイアボトル・デイスチャージ！」

キャプテンがひとときわ鋭く叫ぶ。セカンド・オフィサーが消火ボタンを押した。同時にフレオングスが噴出して消火が始まるはずだが、その様子はここからでは見えない。

ファースト・オフィサー（副操縦士）が階下のバーサーに事態を知らせ、火災の状況を確認するよう指示した。コック・ピットは二階最前部にあり、後ろのファーストクラスの客室はひとつそりと寝静まっている。

一階の客室でも、大半の乗客がシートを倒して眠りについていた。定員二百六十四名のジャンボジェット機はすいていて、六割がたの席が埋まっている程度である。

その中には目醒めている者もいて、彼らは大柄なアメリカ人バーサーが只ならぬ様子で通路を走っていく姿を、驚いて見守った。スチュワードがそのあとに続く。ベルト着用ランプも点っているのだ。

最も早く事故を目撃したのは、右翼のすぐ後ろに当るビジネスクラスの窓際に掛けていた日本人であった。ニューヨークと東京を何度か往復している三十代のビジネスマンで、彼は六時すぎに目を醒ましていた。離陸後間もなく機内食をすませてから眠り、アンカレッジの手前あたりで目を醒ますことが案外多い。そんな時にはしばらく書類を読んだりしていると、また眠気を誘われ、つぎには朝食で起こされる。

窓のシェードを開けると、ほの白い空間の中に雲の流れる気配がかすかに感じられた。読書灯を点し、タイプの活字と窓の間に、いく度か視線を往復させた。

と、突然翼の下からボツと火が噴き出したのだ。火はたちまち燃えひろがり、丸いエンジンが炎に包まれるのがわかった。

「あつ」と彼は大きな声をあげ、思わず左側の乗客へ手をのばした。早く誰かに報らせなければという咄嗟とつぜんの行動であった。

隣には中年のやはりビジネススーツを着た日本人の男性がいた。彼はシートを倒していたが眠ってはいなかったらしく、すぐに目を開け、そして息をのんだ。二人は同時に立ちあがった。

乗務員が走ってきたのはその時だった。バーサーが通路脇の窓のシェードを押し開けた。赤々とした炎の反映が機内へさしこんだ。目醒めていた乗客は総立ちとなり、大勢が右側通路へ走り出た。

火勢はいよいよすさまじく、まるで大きなバーナーから噴き出すような炎が翼の上を舐め、今

にも翼全体を焼きつくすかに見えた。

「第三エンジン」「消火器」といった単語が乗務員の間をとびかうのが聞こえた。消火器は働いているのか？

燃料タンクに火が移ったら？

第一発見者のビジネスマンの脳裡に不吉な想念がゆらめいた。
墜ちるのではないか？

自分はここで死ぬのだろうか——？

心臓が早鐘を鼓っている。彼はまだ無意識に、隣の乗客の二の腕を掴んでいた。その男もまた、茫然として燃えさかる「死」を凝視^{みつ}めているにちがいがなかった。

みんな死ぬかもしれない——彼はまた思った。

第一章 日光中禪寺湖

1

日光の観光シーズンは、十一月文化の日を境にして入れ替る。

四十八曲りのいろは坂から中禪寺湖の一带は紅葉の名所として知られているが、それも十月半ばから下旬にかけてが盛りで、その後は目に見えて色褪せていく。モミジ、ミズナラ、ウルシ、フナ、シラカバなど多種類の木々が落葉をはじめ、山々は杉と縦だけを残して寂しい枯葉色に被われる。湖の東にそびえる男体山の頂上が薄く雪化粧し、湖水がいつそう藍色を深めるにつれ、風は肌^しに染みる冷たさを帯びてくる。

一九七九年は文化の日が土曜に当たっていたため、連休には紅葉の名残りを惜しむ観光客で旅館街はほぼ満盃となった。

彼らが潮の退くように引きあげたあとでは、にわかに秋色が濃くなったかに感じられた。それは例年のことでもあり、その後はつぎの若葉の季節まで、正月三ガ日の賑^{にぎ}わいをのぞいて、日光は長いオフ・シーズンに入るのである。

十一月十日土曜日の夜――。

中禪寺湖東岸の「歌ヶ浜」も、ひっそりとした夜陰に包まれていた。中禪寺温泉街の南に当

り、朱塗りの立木観音堂の周囲に伝統の古いホテルと旅館が二、三軒、それに大使館別荘などが散在して、上品な避暑地の趣をたたえた区域である。

湖畔のドライブウェイを、一人の男が小走りに温泉街のほうへ向かっていた。九時四十分ごろで、路上にはほかに人影は見えず、車もほとんど通らなかった。かなりの間隔をあけて外灯が点り、昼間の雨で濡れた路面を青く光らせている。すでに雨は上って、代りにほの白い霧が漂い出ている。が、視界を塞ぐほどの濃霧ではなく、気温も案外高くて、十一月にしては心地よい夜だった。これが一週間前までなら、湖畔の遊歩道がまだ賑わっていてもおかしくない時刻なのだ、なにぶんにも文化の日を境にして、めっきり寂しくなってしまうのが常であった。

やや太り気味で大柄な五十年配のその男は、時には走り、疲れると速歩になりながらも、ひたすら急ぎ続けていた。パーバリのレインコートを着た両腕を振り、前屈みになった姿勢も、彼のせわしない気持をあらわしていた。

遊覧船の乗り場の前で右へ曲り、土産品店の立ち並ぶ通りへ入った。さすがに商店はどこも電光を明るくしていたが、客の姿は数えるほどで、かえって閑散とした有様を際立たせるほどだった。

バスターミナルの前からゆるい坂をのぼって、男はようやく目的の場所に辿りついた。モルタル塗りの小ぢんまりした建物の軒下に丸い赤ランプが点り、傍らに「日光警察署中宮祠派出所」と墨書きした板が下っていた。

派出所の中では、二十七、八くらいの制服の巡査がデスクの前に腰掛け、入ってきた男を見守った。

男はややおずおずとした動作でそちらへ歩み寄り、呼吸を整えてから、やっと声を発した。

「あのう、実は、家内が散歩に出掛けたまんま、まだ帰ってこないもんですから……」

巡査は、九時四十八分を指している壁の時計を見あげ、相手の顔へ視線を戻した。白髪混りの眉の下に窪んだ眸、円みのある小鼻と軽い受け唇などが、穏やかでおとなしい性格を想像させた。上背と肩幅も十分ありながら、たえず背中を丸めているような姿勢も、顔立ちと同じ印象を与えた。

「どちらへ行かれたんですか」と巡査は尋ねた。

「あちらの……立木観音より先の遊歩道のほうへ……」

男は派出所の外へ手を向けた。

「ああ……で、あなた方はホテルか旅館に泊っておられるわけかね」

巡査はもう一度相手の風体を眺めた。上質らしいレインコートや高級腕時計など見ても、地元の人間とは思われない。

「ええ、レイクホテルに……今日の昼すぎに着きましてね。夕飯のあとで散歩に出て、家内がしばらく一人で歩いてきたいといったもんですから、わたしはあそこらへんの、きれいな別荘の庭に入って待っておったんです。ところが一時間以上たっても帰ってこないもんで……」

彼は妻が歩いていったほうを十五分ほども捜してみたが、一向に姿が見えず、胸騒ぎがするの
で派出所に届ける決心をしたと、多少気兼ねするふうにのべた。

巡査がもう少しくわしく訊いてみると――

男の氏名は千成暉夫、五十四歳。妻は峯代五十二歳。金属洋食器の会社を経営しており、住居は東京の田園調布にある。今日は二人で東武電車であつて、いったんホテルへ入り、夜八時ごろ散歩に出た。峯代は一人で、立木観音堂の下から湖岸に沿った遊歩道を歩いていった。千成は付近

の庭園の椅子に掛けて待っていたが、九時をすぎても峯代が帰ってこないの心配になり、偶々庭園に入ってきた若い男性にもわけを話して、手分けして捜してみたが見つからなかった。ホテルにも戻っていなかったの、その足で派出所へ来たというのであった。

「家内は、百六十三センチほどで大柄なほうです。ピンクのコートと、下には白地にえんじの水玉模様のパンタロンスーツを着ておりました」

千成は巡査に問われて答えた。五十二歳の女性にしては派手な服装だと巡査は感じた。

「奥さんのほうから、一人で歩きたいといひ出されたわけですか」

「そうなんです。いろいろ考えごとがあつたようで……いや、うちの会社は家内が社長をしておりましてね」

千成はかすかな笑いを浮かべていい添え、つぎにはまるでその事実が痛ましいとでもいうふう

に、ゆっくりと眉をひそめた。

巡査は奥の部屋へ入り、責任者の警部補に事情を伝えた。ひとまず、千成がいう辺りを搜索することになった。

もう一人の若い巡査が派出所の車を運転し、先の巡査が助手席に、千成が後ろに乗って出発した。

まず、手前のレイクホテルに寄り、フロントで尋ねたが、やはりまだ峯代は戻っていないかつた。

ホテルの私道を引返し、再びドライブウェイに出ると、斜め向かいの湖岸寄りにグリーンの洋館が建っている。汀までのなだらかな斜面は白樺の木々を配した庭園で、鉄柵の門扉が開いたまま錆びついたように開放されていた。